



わすれられないたん生日

わたしは、夏休みになりよう親がはたらくお店でふざけてあそんでいて、ガラスで足を切る大ケガをしました。その時は、おこられると思つてイタイのをグッとがまんしてなきました。

びょういんについて、しんさつ室のベッドの上でふあんでいっぱいでした。そんなわたしに、ずっとやさしい声かけではげましてくれた1人のかんごしさんがいました。

先生が「これは、ぬわないとね」と言った二言で、わたしは今までがまんしていたなみだが、ワーと出て止まりませんでした。

かんごしさんが「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と声をかけてくれて少しおちついたら、お母さんが

「この子今日たん生日なんですわ」と言いました。そしたら、かんごしさんが「それならケーキよういしなくちゃね。でも、ここにはないか」と言つてわらわせてくれました。

それから足をぬいおわつて、ベッドの上でメソメソしているわたしの手に、3つのゼリーをギューとにぎらせてくれました。おどろくわたしに、かんごしさんは「しい。おたん生日おめでとう。こんなものしかなくてごめんね」と言つてくれました。かんごしさんのおやつをこっそりわたしにくれたのです。

わたしは、そのやさしさがうれしくて、うれしくて、足がイタイのもどこかへふつとんでいきました。

〈新潟県〉入江夏希 8歳

ゼリーはつめたかったけど、かんごしさんのりよう手はとてもあたたかかったです。これから何年もやつてくるわたしのたん生日。わたしはきつと、毎年このイタくて、つめたくて、あたたかかった出来ごとをわすれないで思い出すんだろうなと思います。